

## 平成 18 年度 修士課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

「ADL が自立している在宅脳卒中後遺症者の自信と参加の関心の検討」

学位の種類: 修士 (作業療法学)

保健科学研究科 作業療法専攻 学修番号 05855605

氏名: 鈴木 ひろみ

(指導教員名: 山田 孝教授)

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1 枚 (A 4 版) に収めること

【はじめに】脳卒中後遺症者の参加に関する報告では、機能レベルや ADL 能力との関係の検討はされているが、意志的側面との関連や ADL 自立度が高い人についての参加を伝えるような研究は少ない。しかし、作業療法実践において「ADL がほぼ自立しているにもかかわらず参加が制限されている人」は少なくなく、その理由として意志的側面(自信)との関係が考えられた。【目的】本研究は、ADL が自立している在宅脳卒中後遺症者(以下;脳卒中者)の自信と参加の関係を検討することにより、作業療法における具体的介入の方針を得ることである。【方法】対象者は 50~80 歳の地域在住者で、脳卒中者と健常者のそれぞれ 31 名とした。自信は一般性セルフエフィカシー尺度(以下;GSES)と作業に関する自己評価改訂版(以下;OSA II)を用い、参加は生活時間調査票を用いて典型的な 1 日の作業を聴取した。参加内容は「外出:交流:役割:所属」とし、参加頻度は「毎日:1 回以上/週:1 回以上/月:それ以外」、参加の質は「社会的:仲間的:個人的およびサービス利用」と基準を設定した。また、得られた情報から参加パターンを分類し、さらに脳卒中者の参加パターンは、健常者を基準にして「健常者類似群(以下;類似群)」と「健常者相違群(以下;相違群)」に分類した。分析方法は、1)脳卒中者と健常者の自信の比較、2)脳卒中者と健常者の現在と発症前および 1 年前の自信の変化、3)脳卒中者と健常者の参加の頻度および質の傾向とパターンの比較、4)脳卒中者と健常者の参加パターン別の自信の比較をそれぞれ分析した。なお、1)4)の分析は Mann-Whitney 検定、2)は Wilcoxon 検定、3)は Kruskal-Wallis 検定で「類似群」「相違群」「健常者」の 3 群比較を行った後、それぞれ Mann-Whitney 検定を用いて有意差を算出した。【結果】1)脳卒中者と健常者の自信の比較では、有能性と満足度に有意差が認められた。2)脳卒中者の現在と発症前の GSES の変化では、「合計」「行動の積極性」「能力の社会的位置づけ」で有意差が認められた。3)脳卒中者と健常者は、頻度の違いは少ないが質に顕著な違いが認められ、脳卒中者間においても質の違いが認められた。4)自信と頻度の関係は、「相違群と健常者」で有能性と満足度に有意差が認められた。自信と質の関係は、「類似群と相違群」「相違群と健常者」で GSES と有能性および価値に有意差が認められた。【考察】脳卒中者は、能力を発揮し自分の意志で作業を遂行し得ているとは思っていない傾向にあり、また、参加の頻度よりも質の違いが自信に影響することが示された。さらに、参加の状況は自信だけでなく作業に対する価値や満足度にも影響していることが示された。このことから、ADL が自立していても参加を促すための支援が必要であり、また、その支援には、意志的側面(自信)へのアプローチの必要性が示唆された。